

特集

腎臓移植外科

診療部長(腎臓移植外科) 藤原 拓造



腎臓移植外科は腎不全患者さんの腎代替療法における外科治療、即ち腎移植ならびに腹膜透析に必要なチューブ挿入術などの診療を担当しています。また、当院は日本臓器移植ネットワークの特定移植検査施設に指定されており、脳死下などの臓器提供の際、ヒト白血球抗原(human leucocyte antigens; HLA)タイピング、ドナー(臓器を提供される方)・レシピエント(移植を受けられる患者さん)間の交叉試験などの業務も行っています。

腎移植

腎移植には健康な方から二つある腎臓の片方を提供してもらい移植する“生体間腎移植”と頭部外傷・脳出血などにより脳幹を含む中枢神経の機能が回復不能となった第三の方々の善意の贈り物として提供された腎臓による“献腎移植”的二つの種類があります。提供された腎臓は元の腎臓の場所ではなく下側腹部に新たな場所を作り、血管同士、尿管と膀胱とを吻合し移植します。腎移植を受けられた後も拒絶反応を抑えるために免疫抑制剤等の服用が必要になります。残念ながら移植された腎臓は永久に機能するものではなく少しづつ機能は悪化していくことが多いです。

当院では1988年に腎移植を開始して以来、2020年までに334例の生体腎移植、94例の献腎移植、合計428例の腎移植を行っています。

特定移植検査施設としての業務

生体腎移植前のドナー、レシピエントの免疫学的評価(HLAタイピング、リンパ球交叉試験、ABO血液型不適合移植の際の抗A、B抗体の力値の測定など)を行っています。2013年からは、従来の直接細胞障害性試験に加えて、フローサイトメトリーによる交叉試験、抗HLA抗体のスクリーニング検査を加え、さらに2016年よりは単一の抗HLA抗体検査も開始し、詳細な検討を行っています。

レシピエント・コーディネーターの活動

臓器移植医療とはドナーとレシピエントの存在によって成立するという特殊性のため、レシピエント・コーディネーターは、医療チームと患者・家族の間に立ち、臓器移植診療を円滑に実施できるように調節する専門職です。

生体腎移植の際には、移植前のドナー、レシピエント評価より関わり、ドナーの意思確認、意思決定などを援助します。移植が決まった際にはドナー、レシピエント及びその家族に、

2020年9月より窪田理沙医師が当院腎臓移植外科に赴任し診療スタッフは充実しました。2020年4月よりは高橋雄介医師が当院小児外科に赴任し、主に小児の腎移植を担当しています。

従来の生体間腎移植は親子間移植の場合が大多数でしたが、最近は夫婦間での移植が増えています。一つの理由に約30年前からわが国でも開始されたABO血液型不適合移植の進歩によると思われます。当科でも22年前より取り組み、移植前に血漿交換などの処置が必要ですが、適合移植とほぼ同じ成績となっています。

現在、当科には透析を受けながら献腎移植登録をされ待機している方が200名近くおられます。臓器提供の意思があり実際に移植までいたる場合は最近では年平均2回しかないので実情です。2010年に臓器移植法が改定、施行された以降、最近では脳死下提供の献腎移植が増え、当院でも2020年までに22例の脳死下提供献腎移植を行っています。

献腎移植登録時のHLAタイピング、血清保存を行い、1年ごとの登録更新時に血清の交換、保存しています。当院の近隣の施設から臓器提供があった場合、当院でドナーのHLAタイピング、レシピエント候補との交叉試験を行い、日本臓器移植ネットワークに報告しています。

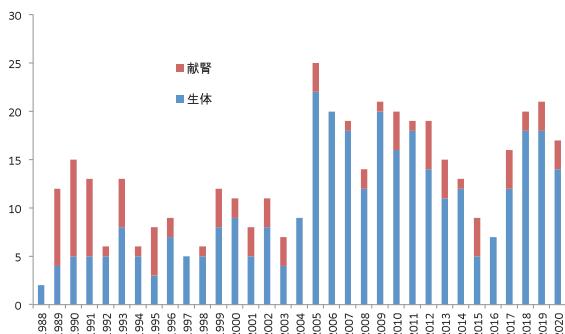
移植医療の実際を具体的、総合的に説明し円滑に移植が行われるように支援します。腎臓移植外来でレシピエントのフォローにも関わり、患者の身体的管理、精神的援助を行っています。

臓器移植推進活動

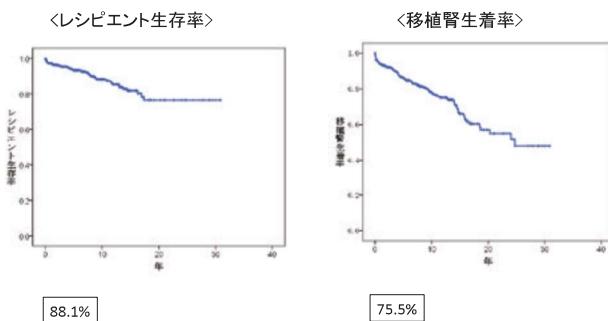
公益財団法人岡山臓器バンク、公益社団法人日本臓器移植ネットワークと連携し移植医療一般の啓蒙、脳死下・心停止後の臓器提供が円滑に施行できるように社会活動を行っています。県臓器バンクの移植コーディネーターと密に連携し献腎移植が円滑に行えるように準備し、腎移植医療の実

際、献腎移植の登録法などについての講演会を行っています。また、県臓器バンク主催の臓器移植に関する講演会、啓蒙活動を支援しています。

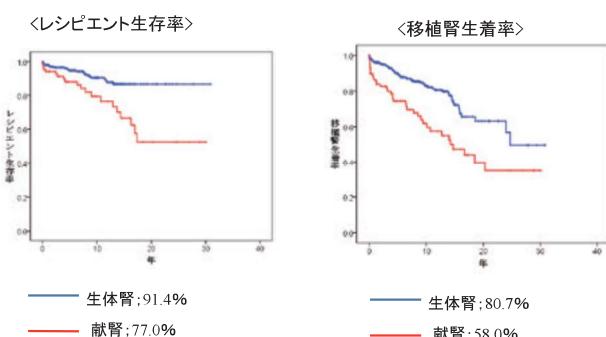
年度別腎移植実施数



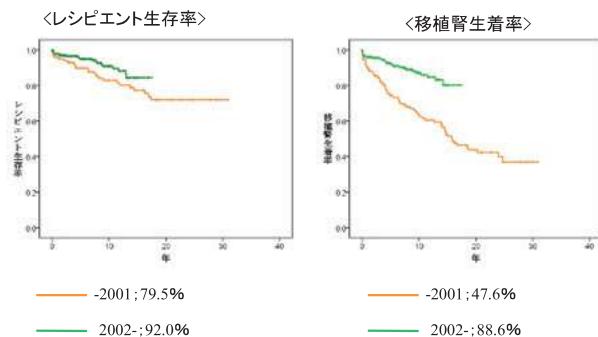
全症例の成績



生体腎、献腎別治療成績



年代別治療成績



スタッフ紹介



[写真左から] 検査技師(小坂、中川)、医師(窪田、藤原)、レシピエントコーディネーター(槙原、竹本)